

僧院での修行

黒田大圓 (武 志)

伊達木昂訓 (たかのり)

司会／ 佐藤俊明 (しゅんみょう)



伊達木昂訓

神奈川新聞社会部記者



黒田大圓

成寿山善光寺住職

●座談会

タイの

金は天下のまわりもの

司会 会々今日はお忙しいところおいでいただきまして
ありがとうございます。

伊達木 〓いいえ、どうも……

司会 会々実は『成寿』の先月号で、方丈さまが「大なる哉ころ」という題で、とても面白いお話をなさったんです。それは、大学を出られて日本一周なさるまでの



司会／佐藤 俊明
千葉県龍光寺住職

話なんです、それから次はタイに行かれる訳なんですね。どういう動機でタイに行かれたのか、そのお話をしていたら、それからタイでのいろんな出来事などについてお話を聞きたいと思うんですが、さいわいタイで、伊達木さん、お会いなさったそうですね。

伊達木 〓そうですね。

司会 会々それじゃ方丈さん、まず、タイにお行きになられた動機をお話したいんですが。



タイ修行中の黒田方丈

方丈はいい、大学から大学院終わってアメリカへ行こうと思っておりましたが、アメリカの兄からも少し修行しろといわれ、特別僧堂に入ったことは前の講演の中でお話し上げた訳でございますが、特別僧堂といっても、大衆と同じ事をしている訳で、これでは何も特別僧堂の意味がないじゃないかと、非常に疑問を感じ、2年目ごろから「ここにおっても仕方がない。何かやろうか」というような事を考えました。

その時は、石附周行師が、「特別僧堂がおわったらインドに行つて、インドの仏蹟を参拝しよう」というもんですから、「それは素晴らしい事だ。よし、インドに行こう。しかし、ただインドに行つて仏蹟を参拝するだけじゃ意味がない。ついでにタイに行つて修行しようじゃないか」と、というような事を話したら石附君も「そりゃ、いい事だ」と、話がまとまったんです。さて、中外日報がその当時、立正佼成会と共にインド仏蹟の巡拝団を構成してましたので、第2回目があれば中外日報主催のインド仏蹟参拝団に入りたいと、中外日報の社長に相談に行つたんです。「参拝団に入れていただきたい。ただし帰りはタイに残つて修行したい」というと、本間社長さんが、「それじゃ、タイで修行したのがあるから紹介しよう」といって、島口という方、もう亡くなつた方で、喜禅老師のお弟子でしたが、バンコックから帰ってきたんですが、曹洞宗では受け入れられなくて日蓮宗で、お寺を持つた方なんです。その方はインドから、飛行機の中に隠

して、菩提樹の根のついたものを持ってきたという変わり者なんですが、その方から修行するならワットパグナムがいい、と教えていただきました。ちょうどその頃父親が全日本仏教会の組織局長をしまして、色々調べておりましたが、中山理理先生がタイ国の妃殿下と非常に親しいことがわかり、それでタイ国の方にわたりがついたわけです。全日本仏教会では中山先生がプーン妃殿下に紹介の労をとってくださいました。それで日本仏教会の推薦という形でタイに行けることになりました。たまたまその時に、世界仏教徒の青年の会議がサイゴンで開かれるっていうんで、タイで修行したあとは東南アジアを全部まわろう。サイゴンの仏青の世界会議にも出よう、というような目的で事を進めたんです。この時は金がないんで、本山に金を貸してくれといったら、当時の副寺さんが、本山当局で金を貸してもいいと言ってるっていうんで、それじゃ特別僧堂の安居者全員で行こうということに話がまとまったんですが、その後雲行きがあやしくなって、本山



得度式の供養の品々

では金を貸さないとということになり、結局は特別僧堂の中では、僕と石附師と平井師と、それから、森山大行師とで行く事になったのです。インドの仏蹟を参拝してタイで修行しようというのにはそれなりのきつかけがあったんです。というのは本山で修行していると、「これでいいのか？」という疑問に逢着し、この疑問



ナコン・パトムの仏舎利塔

を解決するには、釈尊の四大聖地をまわり、上座部仏教、南方の僧侶たちが何を求めて修行しているのかということをこの眼でたしかめ、宗祖の教えを通して釈尊に還ることが必要だということが、行く最初のきっかけになったんです。しかし、お金もない。インドに行くなどということは、そのころはたいへんなことでした。

司 会 金はいくらぐらい必要だったんですか？

方 丈 中外の会費が四十六万円ぐらいだったんですねえ。しかしその四十六万円というのは大変な金だったんです。本場で金を貸してくれないというもんですから、これはダメだということで、親父に話しました。すると親父は「お前にだけける金全部出せない」というんです。そりやそうでしょう。私、兄弟七人おりますから……（笑）「これはえらい事になった」ということで、ナリスに金を借りに行った訳ですね。インドに行ってお釈迦さまの四大聖地をまわって、タイで修行をして、世界会議にも出たいけれども金がありません。成功したら必ずお返ししますので、社長さん、金をなんとか拝借できますか」と言うたら、「先生、いくらいる？」いや、「いくら持つてる」というから「金はいま一銭もありません」といいました。一銭もないけど、いくらかかるっていうんで、四十六万円かかるっていいましたらね、「四十六万円か。で、どのくらい生活できるか」というんで、「それで一年間で

きる」って言ったたら、「安いもんだ。ヨーロッパへ行ったら一か月間分だ。一年間生活できるなら安いんじゃないか。考えよう」というんですね。その場は引き下がって帰ってきた訳なんです。そしたら、金の用意できたっていうんでナリスに行きました。たまたま父親が、その時は全日仏の局長してまして、よく京都に出張するんですが、出張のうちに、父親と一緒にお礼に行つて、お金を頂戴した訳なんです。その時がまた非常に劇的で、大きなお盆にのし袋に入っているものをうやうやしく持つてきて、私の前に差し出したんです。ところがペシャンコなんでこれは、お金入れんの忘れてんじゃないかと思つてですね、もらつたのはいいが、中に入れるのを忘れたんなら、何とか金入れてもらうように言わなくちゃと、思つていたんですが、父親と、それを頂戴して帰りました。しかし、心配でありませんでした。入つていなかつたら、早く言わなくちゃならん。家に行つてカラッポだつていう訳にはいかないんで、大阪の駅で開けたんですよ。そしたら五

十萬円の小切手だつたんです。それで飛び上がつてやるこんで、それを懐にねじり込むようにして東京に帰つてきて、銀行に行つたんです。これすぐに現金にならないですかと言つたら、「横線があるから、これは現金にはならない。通帳つくりなさい」といわれて、通帳をつくり三井銀行に預けて、インドに行けるといふようなことになつた訳なんです。そんな事がスタートの、金作りの最初だつた訳であります。

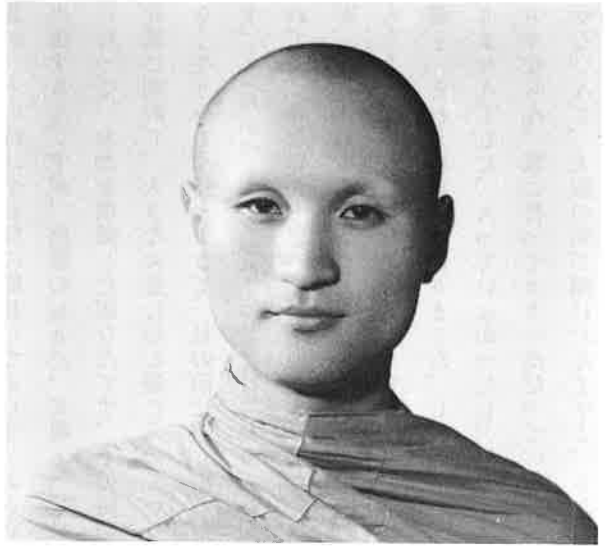
司 会Ⅱしかし、ナリスも偉いですが、方丈さんも随分心臓が強いですなあ。

方 丈Ⅱハハハハ

司 会Ⅱだつて、ナリスとは、参禅会でちよつとお会いしただけでしよう？

方 丈Ⅱそう。ナリスの先代の社長が、「しかし黒田君はすごい人だ。一銭も金を持たないでどこへでも行くつていう。先生はたいしたものだ」とほめて下さいました。

司 会Ⅱいやあ、本当ですなあ。



アंकロー比丘（黒田方丈）

方 丈ハア

司 会ニで、その金返したんですか？

方 丈ニいや、お返しして居りません。いずれ成功した折にお返しをしなければと思つて居ります。

（一同笑）

司 会ニそれは、いつ頃なんですか？

方 丈ニそれがですね、昭和四十年の七月頃であります。

司 会ニで、向こうに渡られたのは？

方 丈ニええ、四十年の十二月に。

司 会ニ十二月に？

方 丈ニハア。十二月の二十日過ぎにインドに、第二回の中外日報のインド仏蹟巡拝団員として……ええ。

司 会ニインドの仏蹟を巡拝して、それからタイに行つたんですね。

方 丈ニそうなんです。

タイ僧となる

司 会ニタイにお着きになったのは？

方 丈ニええ、一月の十日過ぎ頃だったと思います。

インドだけで十六日ぐらいおりましたから。いや、インドだけで二十日近くおりましたから一月の末にタイに入ったんです。で、タイに入りましてね、最初……

三日はホテルで休養してまして、その時、講演で申し上げました伊藤先生に叱咤激励していただいて、石附君とお寺に入つて、それから、お寺の生活が始まるんですけれども、その時には、私、過労と風邪をひいたりしまして、少し具合が悪くて、板の間に毛布を敷いて寝てましたから、調子が悪くてYMCAに行つて、そこで一週間寝て、パリー語の得度式の唱えごとを全部暗唱しました。それで、得度式を二週間ばかりのばしてもらつて得度をしたんですね。ワッポーといいまして、その時はタイで最高の高僧の方、マハニ会の長老でしたが、その方に戒師さまになっていただくというんで、夜、石附君と二人でお願いにあがつたんです。その時がまた印象的でした。大変おやせになつていた住職でしたが、その目の鋭さは、ぼくがいまだかつてそれほど目の鋭い宗教家に会つたことがないほど何か、竜の目のような、人間じゃないような目付きをしているご住職でしたね、その方に戒師になつていただいたんです。式の時も中山理理先生の紹介で、プー



ン妃殿下も得度式にお出ましくださつて、国をあげての大歓迎をしていただいたような得度式をしていただいた訳です。司 会川いまマハニ会とおっしゃつたんですが、そのへんのことを少し……方 丈川はあ、タイでは日本のようにいろいろ宗派は分かれておりませんが、マハニとタムユットの二つの派があるんです。これは今から百五、六十年前になる



んですが、タイでも戒律が乱れてくるんですね。それで、タマユツトという方が、これは皇室の方なんです。出家なさって素晴らしい学者でもあり、発心堅固の方でしたがその方が、戒律の乱れたのを直そう、戒律をもう一度見直そうというんで一派ができたんです。皇室の方、王さまの子供さんでしたからタマユツトは。そんな関係で、只今、王室の方の關係が強いです。あります。マハニ会っていうのは古い伝統を保っている訳であります。これは、二つの派から八人ずつの素晴らしい方が、サンカラージャ、ソムデという役があつて、その中から管長さまがサンカラージャというんで、その両方から、タマユツトとマハニ会から交互に管長が出るんです。二二七の戒律を守る事は同じですね。われわれ日本人からいわせると、マハニ会とタマユツトと分れてはいるが、教義の上ではさほど大きな違いはありません。日本のような宗派の仏教じゃありませんので、大きく言えばもとは変りないと解釈しております。

司 会川ああ、そうですね。そのマハニ会のワツポー

の住職から得度を受けた訳ですね。

方 丈Ⅱ得度はやはりマハニ会の方から受けないと……マハニ会におつてタマユツトのを受けるといふ事はできない訳ですね。

司 会Ⅱワット・パグナムはマハニ会なんですね。

方 丈Ⅱええ。古いほうの形です。

司 会Ⅱ得度を受けるには相当経費もかかって、施主というか、スポンサーが必要なんですね？

方 丈Ⅱそうなんです。

司 会Ⅱそこらへんの経費はどんなふう……。

方 丈Ⅱはあ。これはですね、戒師さまにお礼、その他いろいろありますが、私の時は、戒師さまには自分でお礼をしましたんですけれども、普通の場合は全部お金を出してくれる人がいるんですね。というのは、お坊さんを、二十人三十人とお立ち会いたいただきますから、得度する時に、全部の人に供養する訳ですね。で、その供養の品物は、日常使うトイレットペーパーとか歯ブラシとかハンカチのようなものとか、日常お

坊さんが使う物を、お盆の上にたくさんおせて、供養していただく、それは供養の施主がいらしてね、よろこんでご自分の財力を投じて供養してくれる訳ですね、ですから日本の場合とは全く違って、民衆と僧侶の關係が実にピチツとしておるようです。

司 会Ⅱそうですねえ。それで、得度を受けられたのが二月で、安居に入つたのはいつですか？

方 丈Ⅱ安居は七月になる訳ですが、その頃僕——結局は一たん帰ってくる訳ですね。あとは行ったり来たり。管長さまを案内したり、とそういうふうな事になったんです。

仏縁の不思議

司 会Ⅱそうしますと、伊達木さんがお会したのは？伊達木Ⅱちよつと考えてみたんですが、確か四十一年の二月末か、三月頃だと思ふんです。

方 丈Ⅱ来たのがネ。それですから得度して間もなく



戒を受ける黒田方丈

ですね。春休みでしたね。

伊達木〓そうですね、春休みの前に行きましたんで、多分、着いたのは二月末か……

方丈〓それでパグナムに来たのはそう早くないんだよね。それで何日かおつて……

伊達木〓そうですね。そうですね。

方丈〓それは、僕の記事をみれば全部克明に……

司会〓伊達木さん、その当時は学生だったんですか。

伊達木〓学生です。ハイ。

司会〓タイには何かの御用で。

伊達木〓それが、ご用つて訳でも何でもありません。

前の年に私、沖縄行きましたね。夏休みですけども、当時はまだアメリカの占領下にありましたんで、パスポート取つて沖縄に行くっていう形で、それは、友達と何人かで行ったんですが、それがひとつのきっかけみたいで、もうひとつ外国へ行ってみたいっていう気持ちで、私が潜在的にあったんですね。そうこうしているうちに、私、中野に住んでたんですが……高校時代の友

達がたまたま近所に住んでまして、彼は大学は違うんですが、二人で一緒に安酒飲んでるうちに、「オイ、どっか行かねえか」って話になりました、「よし、じや、どっか行く為には金ためよう」と、二人で勝手な事しながら金をためたんですけれども、前の年の十月か十一月頃に、「じや、東南アジアに行こう」ということで、あらたまつて目的を持って行くっていうんじやなくて、簡単に言えば行つてみよう、ある意味ではヒッチハイクみたいのが学生の間ではやっていた時代なんです。ナホトカ航路で、ソ連へ渡つて、それからヨーロッパ行くつていうようなものが、学生の間で流行っていた時代だったんです。で、寒いところはいやだから、あつたかいところに行こうと、それで東南アジアへ行つたんです。

司 会Ⅱそうですか。で、タイに行かれて、どんな風にしてお会いしたんですか？

伊達木Ⅱあの一、非常に不思議なご縁だと思ってるんですが、関西汽船の安い船、貨物船の、三千トンぐら

いの船に、とにかくタイまで乗せてくれつといいまして、乗せてもらったんです。バンコック着きまして、さあ、どこへ行こうか、別にあても何も無い訳です。最悪の場合YMCAでも、どっか捜せばいいやつというようなつもりで、とりあえず三日間だけは一緒にいようと、それからあとはお互いバラバラになつて三ヶ月、四ヶ月後ぐらいにどっかで会おつていう約束で出かけたんです。たまたま、埠頭へ降りましたら、バス停がいくつか並んでいるですよ。その中で一番ライオンが長そうなのに乗ってみようというんで、ふたりで乗りましてバンコックを横切つて一番長いのに乗ろう。といつて、とにかくトンブリまで行つちやつた訳です。方 丈Ⅱそれが、寺の入口の終点なんです。

司 会Ⅱああ、そう(笑)

伊達木Ⅱええ、そこへ行つた訳ですよ。二人で……もう夕闇でかなり薄暗い時期でしたように記憶してますけども、で、降りて、いくつかが寺がありますんで、ブラブラまわつてた訳なんです。来たばかりで何もわか

らないで……たまたまどっかの寺をまわった時に小さい子供が来まして、「お前、日本人か」っていうんです。「そうだ」っていつてましたら、「佐々木っていうの知ってるか」っていうんですね、「お前、どこだ」っていうから「東京だ」っていいましたら、「佐々木っていうの知ってるはずだ」っていうんです。「いや知らない」って……よく聞いてみたら、この辺に佐々木っていう人がいて、とにかくお前、会いに行けっていうことなんですよ。それで、別に行くあてもないもんですから、じゃ、行ってみようや」っていうんで行って見たのが、黒田さんのいらした、ワットパグナムなんです。

司 会||ほう。で、その佐々木さんっておったんですか？

方 丈||当時はですね、日本人では佐々木さんって方一人いたんです。この方は高野山の関係でおいでになって、日本人の納骨堂があるんですが……

司 会||ワット・リアップ？

方 丈||そう。リアップ。その、納骨堂の日本人の関係の法要などをお一人で受け持っておったんですが、たまたま縁があつてそこからパグナムへ、パリ語の勉強においてになったんですね。私たちはそれでお世話になったんです。で、パグナムがいま有名なのは、副住職がですね、アーチャン、アーチャンっていうのは先生っていう意味なんです、その副住職が、二世なんです。ね。(お父さんが日本人で、お母さんがタ



イ人) 非常に優秀なお方で、日本語ができる方はいまタイ国の高僧、名僧の中で、完全に近い日本語を話せる方は一人しかいないわけです。今日、パグナムが、特に日本と縁があるのはそういう事なんです。われわれも佐々木先生も、河北先生がおられるんで頼っておられたりして、われわれもそんな関係でパグナムで世話をしていたのです。

司 会||それで?パグナムのお寺に行かれた訳ですね?

伊達木||ええ、そうです。

方 丈||それでね、最初に会ったのは佐々木先生のことなんだけど、まあ僕たちの部屋に佐々木先生がいるところに訪ねて来たんです。それでね、「何しに来た」っていったら、「別にアテなく来た」っていうんですね。どこに行くのかというと、決まっていなくて、「じゃ、寺に泊ればタダですむからそうしろ」と。そのうち、二・三日してどうせいるなら坊さんになっ

てはどうか、どこでも乗り物はタダになるしと言って、

勧めた訳です。二人ともそれじやっていうんで、サマネンっていうお小僧さんになった。簡単に言えば五つの戒律を守ればいいですがね、その、小僧さんになつて、私たちのあとを毎日くっついて歩いて、チエンマイに行ったりして、あれで一カ月以上いたんだね。そんなご縁で毎朝托鉢にくっついていたりして。

伊達木||友達と一緒に رفتたんですけど、友達の方はさすがに、「オラア、やめた」って言うんでやりませんでしたけど、僕は何だか気が向いたっていいいますかね。

方 丈||で、石附さんのあとくっついていたり、私のあとくっついていたりして、両方のあとくっついて……。

司 会||五つの戒律って何々ですか?

方 丈||第一不殺生、第二不偷盜、第三不貧姪、第四不妄語、第五不飲酒と。あとは、第六不説過戒、不自讚毀他戒はいんですが、その次はお化粧しないとか、観劇をしないとか、一尺以上の高さのところには乗っちゃいけないとか、いろいろあるんですが、大事なこ

とは、根本的には五戒を守ればいいんです。

司 会Ⅱで、托鉢の時なんか一緒に歩いて行くんですか。

方 丈Ⅱそうですね。托鉢の時はあとにくっついて行く訳なんです。いわゆる応量器の中にいろいろ、バナナやご飯や、たまごなどを頂戴するんですが、水ものも貰う場合、日本でいえばお味噌汁のようなものですか、煮たものですね、そういうものを貰うのに、もうひとつ、重箱にひもがついてる、棒がついてるようなお重があるんですね、そこにひとつづつ貰うんで、それを持っていただいたり……。

伊達木Ⅱハイ、持たしてもらいました。

方 丈Ⅱそれで、托鉢と一緒にできるんですよ、補助的な事をですね。一緒にやってもらっていた訳です。

そんな事だったネ、

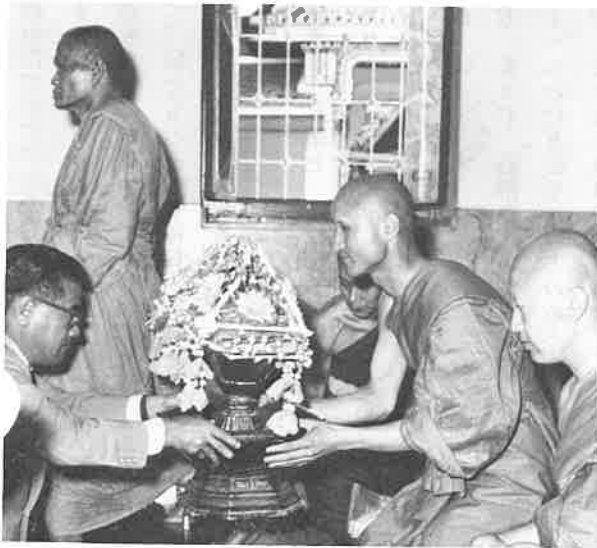
伊達木Ⅱそうですね。運搬係みたいな感じがなきにもあらずでしたけど。

司 会Ⅱきつと面白い話があるんだろうと思いますけ

れども。

伊達木Ⅱそうですねえ。

方 丈Ⅱ伊達木さんは愉快な人でしたから、思い出はホントにたくさんね。何ていっても全然何も知らない人がお坊さんになりましたから、非常に面白い事だし



小谷氏より供養を受ける黒田方丈

た……。

伊達木Ⅱ自分自身でも、まさか向こうでそういう、正式のお坊さんではありませんけども、そういう形になるとは思ってもいませんでしたしね。私の母方の方にちよつとそういう親類がいるんで、そういう事がどっかで心の中にあつたんじゃないかなんて気はしますけどね。だから一ヶ月半、二ヶ月近くいたと記憶していただけますけどね。

方 丈Ⅱ何といつても魅力なのは伊達木先生がいられたつていう事、タダでいられたつていう事だね、(一同笑い)

伊達木Ⅱそうですな(笑)ですからバイトで一生涯懸命ためて、さき程、五〇万つて話出ましたけど、私はその期間五ヶ月ぐらい東南アジアまわりましたけれども、全部で二十万ぐらいで……。もともと、いわゆる乞食旅行やろうつてというのが趣旨でしたし、木綿のセーラーバッグひとつで、全てを持って歩いていましたから、お金もかかりませんでした。

司 会Ⅱチェンマイまでも行かれたと……

方 丈Ⅱええ。チェンマイに行つたんです。佐々木先生と石附先生と私と、伊達木さんと、それから福田さんと一緒にチェンマイにですな。

伊達木Ⅱ確かね、私の記憶ですと、ちようど二人いいのが来た。この機会に、この二人がいるとお金を扱うとか何とかといろいろ役に立つし、また、前から行きたかつたし、ちようどいいから行こうというような事でした。話がまとまつたような記憶してます。



ワット・エメラルド(王宮寺院)にて

司 会|| ああ、そうですか。

方 丈|| それですね。チェンマイに行った時は、バンコックの駅を午後の四時ぐらいの列車に乗りましてね。朝着くんです。

伊達木|| そうですねえ。

方 丈|| 十何時間かかりましてね、それでネ、公園のベンチのような二等列車ですから。金がなくて……。

司 会|| それは、タダですか？

方 丈|| いや、それはタダじゃないんです。お坊さんは半額なんですよ。バスは全部タダなんです。列車は半額なんですがねえ。公園のベンチみたいな座って夜中じゆう走って行っただけです、朝着いた時には顔はもうほこりだらけです。窓がないんですから。エライ旅行でした。今やれていわれてもちよつとできないけれども、とにかく金がなかったからですね、チェンマイに行って、あと、チェンマイ中托鉢しながらお寺に泊めていただいたり、托鉢したりして、ほとんど金なしにチェンマイのお寺をお参りして、泊めてもら

いました。お寺も、その時は安居じゃありませんでしたから、自由に旅行できますんで、パグナムの方のご住職の紹介状をもらってね、それで、非常にお寺で優遇を受けた記憶がありますねえ。

司 会|| そうですか。

方 丈|| 伊達木先生は観光ビザで来たから、二週間おきぐらいに国境を越えてイクステンション（期間延長申請）に行ったように思います。

伊達木|| そうです。

方 丈|| サマネンのかっこうしてねえ。お坊さんなら多少悪いことしても通っちゃやうもんですから、それでビザの書き替えにね、福田さんと二人で……。今のラオスに行つてね、それで書き替えて……。

司 会|| どうしてラオスに行くんですか？

方 丈|| 一度国をね、

伊達木|| 外に出ないと、

方 丈|| 観光ビザですと二週間ですから、それ以上になると一ぺん外へ出て、もう一度入ってきて書き替え

ないと……。

司 会 II ああ、そうですか。

伊達木 II 新規に入ったという形をとらなきゃいけないんで。

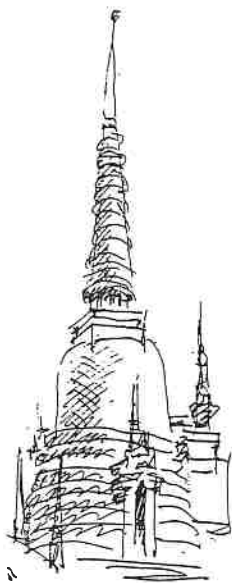
司 会 II それでラオスに行かれた。

方 丈・伊達木 II ハア。

司 会 II なかなか面白いですねえ。

伊達木 II だからチエンマイとかいろいろ行きたいっていう希望は持ってたんですけれども、只、お坊さんをやつてなければとでも行けなかっただろうと思つてます。ふつうの観光ルートをまわるといふ形だったろうと思いますね。それがたまたまそういう事で、お伴をしながらまわられたつていうのは、随分、いい経験になりました。

方 丈 II 何ていつても、お坊さんつていう仕事は素晴らしいつていうか、お金がなくても生きられるつていうね、これはもうとてつもない素晴らしい事だと思つていますねえ。



司 会 II この通り型破りの方丈ですから、向こうでも随分型破りの事をやつたんじゃないかと思うんですが。伊達木 II そういった感じは僕も随分。そうですね、もう十何年振りに、数年前にお会いしましたけれども昔と何も変わつてらつしやんないなあつて感じを受けて、そういう意味じゃ、心安まる感じがしますけれども、昔からこんな感じだつたと記憶してますね。

〃 オイ、伊達木君ちよつとこいヨ。これやれヨ〃なんて

不、随分、こき使われた記憶がありますけど…(笑)。向こうのお寺にお世話になつてる時も、はじめお寺で…パグナムでお世話になつて、實際坊さん、あの得度したのは十日以上たつてると思うんですよ、で、一週間ぐらいたつて、どうだ坊主にならねえかつて話になりました、それまでは毎日朝からふき掃除やらされましてね。

司 会 Ⅱ そのサマネンになる前ですか？

伊達木 Ⅱ ハイ。なる前。どうせタダでお前ら寝てるんだからお掃除ぐらいしろなんてこき使われました。

司 会 Ⅱ サマネンになる時は全部剃髪をして…。

伊達木 Ⅱ ハイ。剃髪をしました。

司 会 Ⅱ で五戒でもきちつと戒法を受けるんですね。

方 丈 Ⅱ そうです。

司 会 Ⅱ 得度式ですか、簡単な。

方 丈 Ⅱ そう。ホントに簡単な。

伊達木 Ⅱ それは佐々木先生にやっていただいて。

方 丈 Ⅱ そうそう、それは高僧、名僧、住職、副住職

ではなくて、その資格がある人ならかまわないんです。あれは副住職にやっていただいたように思いますよ。伊達木 Ⅱ そうです。なつてから…。実質は佐々木さんにやっていただきましたけれど。

司 会 Ⅱ それで、還俗する場合もまた、同じように。

伊達木 Ⅱ ハイ。非常に簡単に還俗できたような…。もともとなりたくてやった訳じゃないもんですから、途中かなり遊んでいたことの方が、あちこち動きまわつた事の方が記憶に残っています。

何が一番つらいか

司 会 Ⅱ 向こうのお坊さんは二二七の戒律を守っているわけですが、一番つらいのは何ですか？

方 丈 Ⅱ 私の解釈ですがこの二二七を要約すると、食べ物に関する事、異性に関する事、それから経済的なものという風な事に簡単に分けられると思うんですけど、分け方はいろいろあつて、二二七を分けてるんですけども、一番なんといっても大変な事は食べ物のこと

です。……。經典にありますように、午後太陽が傾くと食事をしないと……今でもそれを守っていますから。朝の托鉢は陽が出て、手のひらのスジが見えるような時に托鉢に行って、一時間ぐらい、ピンターバーっていつてずつと歩いていくと供養を受けてそれを持ってきてディックっていう小僧さんか誰かが食べ物を買ってにしてお昼はふつうはその残り物を食べる訳です……。十二時過ぎると飲み物は差しかえませんが、コーラとかジュースは差しかえありませんけど、固形物は食べないんです。ただ、チーズは一応食べ物じゃないっていうような扱いを今はしています。私の場合はチーズも食べませんでしたから二食で。一番つらいっていうのは慣れるまでは二食で午後食べないこと。しかしこれは慣れてしまえば全然問題ないと。これがひとつですね。それからひとつ、異性に近づかないと。これは女性を不浄なもの、これは言葉が悪いんですがそういうふうな解釈をして



アユティア(山田長政墓参のあと)にて

いますから、女性のそばへ行かない。女性も衣にでも触れたらやつぱり罪悪になる、地獄におちるといような感じがありますから、絶対にお坊さんのそばにはこない。というような事で、異性に近づかないと。結婚したいとか、恋人とかフィアンセがいるっていうときはお坊さんをやめてしまえばよい。永遠にやっているとプロのように、ずつとお坊さんで通す以外は結婚したければ自由にそういうふうな事ができますから、



ワット・アルン(暁の寺)

やめてしまえばいいんです。それからあとは、お金ですが、これは、サンネマンのお小僧さんかディックっていつて世話をする少年にたのめばですね、手紙を出すとか、何か欲しいものがある時は、引き出しの中にお金を入れてあるっていうような事で、お金に手をふれないで生活できますんで、一番大変だっていうのはやっぱり、食べ物朝と昼ですから、これさえ慣れればですね、あとの事は、私は、それほど苦にならないとふんでおります。戒律に関してはいろいろな事がありますが、要するに、やる気があるかないかによつてですね、いろいろ結果的に違ってくるような感じを受けますが。

司 会 日本のお僧堂のように、指導者がビシビシやらせるっていうような事はないんでしょうねえ。

方 丈 全然ないですね。あちらは本当に、いわゆる上座部の仏教は自分がどうするかで決まってくるんです。日本の場合には形の中に入って、その形をブチ破った時に素晴らしい僧侶になるんですが、向こうは自由

の、本当の自由の中の修行をどういうふうに着くかという、その辺でちがって来ると思うんですが。

司 会Ⅱそれからね私、得度式を見せてもらった事があるんですが、あの戒師がですね、得度式の最中タバコを吸ったり、タン壺にタンを吐いたりね、儀式、セレモニーに対する感覚は、日本人とはだいぶ違うような気がするんですが。

方 丈Ⅱ国民性だと思っんです。国民性っていうか、いわゆる上座部の仏教それ自身が、何かやっぱり日本の僧堂のようなものを求めていないところにあると思うんです。もうひとつ、暑い国ですから。インドで仏教がすたれたのには氣候の問題があると思うんですね、あまりにも暑すぎる。そうするとピチツと日本の僧堂のように形の中に生きて行くという事はなかなかできな。日本人は何故できるかっていうと、四季、氣候に非常に恵まれている。国民性が几帳面だからできるっていうような感じがします。

司 会Ⅱそうですね。

方 丈Ⅱあととはですね、よしあしとなるとこれはいろいろな点でどっちがいいというような事を申し上げる事はむずかしいんですけども、タイには、現在のような形は尊ぶべきものであるし、また、何百年もの伝統のあるものは大事にしなくちゃならないけども、ただそれを本当にどういうふうにとらえてゆくかという事、^{まよ}行じて行くかという事が大事な問題であると思うんです。ですから今タイで大きく問題となっている事は、去年のところで、成田君が帰ってきたところの話によると、得度をするお坊さんが五十%を割ったついでなんです。今までは、どこのお寺で、どなたについてお坊さんになったかというのが世の中の出世のキツプだった訳ですね。それがこのところ大いに変わってきたついでというのはヨーロッパあたりに行つて勉強してきた人たちは、ヨーロッパ的な物の考えで、仏教そのものを、いわゆる仏の、仏陀の教えて、慈悲によつて人間が救われてゆくついでというような考えじゃなしに、物質的な面が非常に強くなつてきて、今後の若い方が

いろいろ変わる事があるんで、どんなふうにして行くかっていうのが、今後のタイの高僧の方々や名僧の方々の大きな課題だと思えます。

二二七の戒律を守ってればいいというだけでは、高度の文化が発達したところに非常にむずかしくなってくるというのが、タイに関するひとつの不安がありますね。

司 会〓そうですね。伊達木さん。サマネンとして割合自由な立場でね、タイの仏教をご覧になって、いままた新聞記者としてご活躍な訳なんですけど、タイの仏教にどんな感想をお持ちでございますか？

伊達木〓そうですね。なったひとつの理由っていうのも、せっかく学生の時に自由にこれるんだから、要するに中から見たい、単なるサイトシーイングで観光で見ると違ってね、中から見てみたいっていうのがひとつの動機でもあるんですけど、やっぱり、私が知っている日本の仏教と、タイの仏教とはいろんな意味で違っているし、お坊さんの修行の仕方も違っていると当

時感じていましたね。ひとつは、いま方丈さんからも話がありましたけど、当時やっぱり生活の中に仏教が完全に溶け込んでいると思えました。お寺にいても、地域の人たちがお寺に来て、ある一時期を過ぎたり、いろいろなお話をしたりという、ある意味でお寺からみるとうらやましいっていうんですかね、国民の生活の中に仏教が伝統的に息づいているという形のもの。日本もかつてはそうでなかったんでないかなっていう気持ちで非常に受けた記憶があります。

タイで得たもの

司 会〓方丈さん、タイに行かれました一番大きな収穫って何でございましたか？

方 丈〓やっぱりですね、宗教家として戒律はですね。守るべきものはどんな事をしてもし守らないと宗教のいのちはなくなるといふ事を、これは私いままでかって学んだ最大の収穫だと、それでなかったら、釈尊の教えってというのはこれは、成り立たない。守るべきもの



タイの葬儀に参列

はいのちをかけても守って後世に伝えて行くと、そういう、大誓願を立てないと、宗教というか、特に釈尊の教えが永遠に続くというのには、僧侶が自覚をして、本当の釈尊の教えは何かと、いうところのものを腹に納めなくちゃならないなと気がついた事が、私のタイで修行した最大の収穫であったんじゃないかと思うんですねえ。

司 会IIそこから宗祖を通して釈尊に還れという考えが出たんですか？

方 丈IIそうですね。私はね、何ととっても日本の場合は宗派の仏教でありますから、これを否定することはできないんで、それを通して、どうしても本当のものを生かしていくというのがわれわれ宗教家の使命であるというような事をタイで、戒律を守って生活生活をさせていただいた中で、何かもうそれ以外にないなあと感じたんですねえ。

司 会IIそうしてお考えの十五年間の蓄積が今度の留学僧派遣という大誓願を实地にうつすご活動になられ

た訳ですね。

方 丈Ⅱ結局、僕がですね、タイに安居させてもらい、それからアメリカにも行かせてもらって、何というてもとにかく日本の場合には島国で、多くの海外の人と接する事がないから唯我独尊的なところがある訳ですね。でも一步世界に出ますと、心が大きくなければ、一升の枘には一升しか入りませんけどこっちに一斗の器があれば一斗のものが入ると。それを理解するにはどうしても語学をですね、その国の語学ができなければダメだと。しかし、ありとあらゆる言葉はできません。われわれには一人で十カ国もの言葉ができる事はこれはもう希でありますから、せめて言葉が充分じゃなくても、その国の人たちが何を考えているか、何を望んでいるかという、相手の国の事がわからなければこちらの事もわからないという事で、どうしても、日本だけにいたんではもう仏教は本物は生かす事はできないというような事で、どんどん世界に出て、世界を学んで、そしてその中で日本の仏教の素晴らしさ、釈尊の教

えの素晴らしさを大いに世界に広め、なおかつ、世界の人人々と共に生きてゆくっていうんじゃないと、日本の将来はあり得ないと、いうところに私の、海外に若い修行僧を出すというひとつの目標というかあるように僕は解釈をしています。

司 会Ⅱそうですね。さいわいタイに派遣する二名の留学僧が決まったんです。十五年間にして理想の第一歩が実現されたという事で大変おめでとうございます。伊達木Ⅱそれは、おめでとうございます。

方 丈Ⅱみなさんのおかげです。日本人の中には、小乗と言って上座部仏教を軽蔑している人がおられますが、私は、上座部仏教が尊いという事じゃなしに、どう生きなくちゃならないかという事を学んでもらおうと思っております。それについて、アメリカにも行ってもらうて、アメリカの新しい仏教の息吹きというか、禅のよなものをおアメリカ人がアメリカ人なりに解釈している、そういう人たちに大いに接してもらって、勉強してもらおう。



座談会終了後

伝統の中のイギリスの人々、フランスの人々に接し、
芸術の都のイタリアにも行ってもらって、本当に世界中
の人が何を願っているのかという事を仏教を通して勉
強していただかなくちやいけないナと、こう思ってい
るんです。世界はひとつだというようなところにまで
話をすすめ、実現してゆきたいという願いを持ってい
る訳であります。

司 会 成功をお祈りします。

一 同 ありがとうございます。

(善光寺に於て収録)